

ひたちなか 埋文だより

29



人骨のクリーニング作業に見入る 小学校の団体見学が多い時期に合わせて、三反田蜆塚貝塚から出土した埋葬人骨のクリーニング作業を公開しました。アメリカには、恐竜化石のクリーニング作業を見せしている自然史博物館が少なくありません。企画展のヒントは、その辺りにありました。人の骨を見るのも初めてという児童がほとんどです。ガラスに額をつけ食い入るように見つめています。「やってみたい」という声が聞こえてきました。

(2008.6.27 高野小学校 6年生社会科見学)

CONTENTS

第2回企画展 三反田蜆塚貝塚人骨のクリーニング

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第1回 考古学との出会い (川崎純徳)

1ケース・ミュージアム8 加曾利と堀之内

1ケース・ミュージアム9 ひたちなか市域の石製模造品

「千葉県の見塚散歩」に参加して (臼井克夫)

「ふるさと考古学」をお手伝いするまで (綿引逸雄)

展示資料紹介 三ツ塚古墳群の鉄鏃 (稲田健一)

ひたちなか市の遺跡② 勝田一中学区編 1

歴史の小窓① カスこそ宝…?

虎塚古墳花便り① ヤマユリ

ほか

三反田蜆塚貝塚人骨のクリーニング

2008年5月13日(火) - 8月19日(火)



発掘時の状況 現地での観察と記録が完了したら、人骨は取り上げられます。1982年度調査の第1号人骨は、骨格の残りがかなり良いことから、埋葬状態のまま保存されていました。

三反田蜆塚貝塚の人骨

三反田蜆塚貝塚を学界に初めて報告したのは、一八八七(明治二〇)年の大矢透(とほろ)でした。大矢は、後に国語学者として大成した人です。同年の八月、脚気(かっけ)の転地療養のために水戸市に滞在していた大矢は、平磯に遊ぶため小舟を雇って那珂川を下っていました。岸から呼び止める者があり、舟を岸に着けると、そこが三反田でした。大矢は、目的地を磯崎に変更して歩き始めます。坂を上り、しばらく行くと老婆と子供に出会いました。ここからの会話の記録に、大矢の本領が発揮されています。ひたちなか市域の当時の方言が文字で残されているので、これも引用して紹介しておきましょう。「コノヘン二何カ古イ塚デモナイカイ」と尋ねると、「今デモカエツコノアル塚ガアンベヨ」「オラーオッセテヤンベイ」と案内してくれます。辿り着いてみると、そこは「路上圍面貝殻満布し繩紋土器の破片其間に散在する」という状況であったそうです。「草菜の中土器の残缺累々堆積せり余手を以て掻き別け中に就いて形稍大なるもの紋理の異なるもの四十八枚と上膊骨と覚しき人骨一片を拵び取れり」というように、遺物を採集したことが記述されています。また、近くの畑を耕作する地主からは、「此畑カラワツチノ宅地カケテ三反二面二貝殻ガ埋(ノマツ)テ井スガ、ホツケエスト折々骨(ゴツ)ナドガデヤンスコトモゴンザリヤンス」と聞かされました。偶然にも訪れることに

なったのが三反田蜆塚貝塚であり、大矢は那珂川流域において最初に発見された貝塚の報告を残すことになりました。この時、既に人骨についての記述が見られるのです。

三反田蜆塚貝塚は、一八九三(明治二六)年に若林勝邦(かつくに)、一九五二(昭和二七)年に勝田町郷土史編纂委員会、一九六七(昭和四二)年に早稲田大学の西村正衛(まさえ)、一九六八(昭和四三)年に藤本弥城(やじょう)が学術調査を、一九七九(昭和五四)年から現在までに市教育委員会が七次に及ぶ行政発掘を実施しています。これらの調査により、判明しているだけで二〇体を超える埋葬人骨が検出されました。埋葬姿形には伸展葬(しんてんそう)が四体、屈葬(くつそう)が八体のほかに、座葬と報告されたものが二体あります。市教育委員会が実施した一九八二(昭和五七)年度の調査では伸展葬の人骨二体、一九八二(昭和五七)年度の調査では屈葬の人骨二体が、薬品を使用した処理で周囲の土壌ごと固められ、そっくり切り取るようにして遺跡から運び出されました。そのまま二五年以上が経過した人骨には破損と劣化が見られ、また、土壌に貼り付いたままでは人骨の観察もままならないことから、新たにクリーニング作業を実施することにしました。埋葬状態を細かなところまで観察して図面を取り直し、骨を土壌から分離させて、一つ一つの骨を観察できる状態にして保存します。作業とはいえ新たな知見をもたらすことから、これも調査の続きということになるでしょう。

(鈴木素行)

クリーニングの作業

今回クリーニング作業を行った人骨は、一九八二(昭和五七)年度、市教育委員会発掘調査時に検出された四体の人骨のうち、「第一号」という番号を付けられた人骨です。

検出された状況としては仰向けの状態で、頭は西の方角へ向いていました。顔は自身の左側を向き、両足は折りたたんで、膝を左足側に倒していたため、左足の上に右足が重なっていました。いわゆる「仰臥屈葬(ぎょうがくつそう)」という埋葬姿勢です。左手は伸ばした状態で体の横に、右手は肘から先を左手側に曲げ、胸の上に置いていました。足や手の指の骨がいくつか無くなっていましたが、ほとんどの骨が残っていました。

クリーニング作業の手順としては、発掘現場で行う調査と同様に、骨を動かさないように注意しながらできるだけ周囲の土を取り除いて、骨の形が見えるようすることから始めます。取り除いた土は後でふるいにかけてながら洗い、乾燥させ、細かな遺物が入っていないかを調べるために採っておきます。骨の形がきれいに出たら、その状態を写真と図面に記録します。

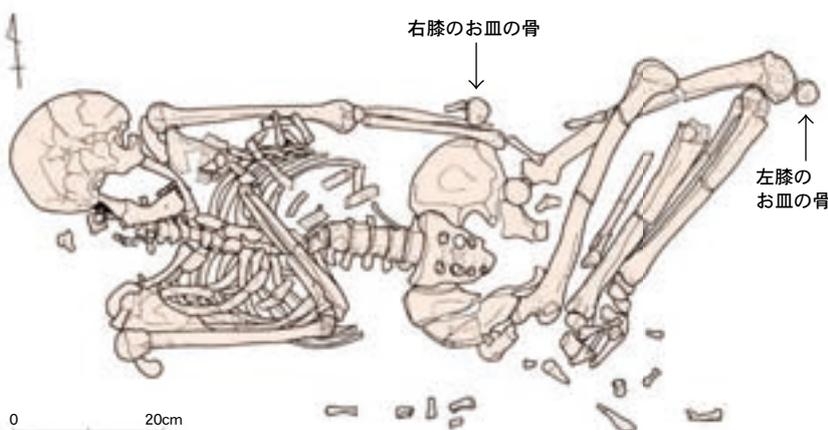
図面を取り終えたら、図面とそれぞれの骨を対応させるため骨に番号を付け、それを図面に書き入れながら取り上げていきます。いくつもの骨が重なっている場合は、上の骨を取り上げ

た後、再び下の骨の形をきれいにし出し、写真と図面に記録して骨を取り上げる、という作業を何度も繰り返します。

すべての骨の取り上げが終了したら、今度はその骨に付着している土を落としていきます。土器などは水で洗浄しますが、骨の場合は新聞紙などで包んで乾燥させてから、柔らかい歯ブラシやハケなどを使って土を取り除きます。今回の人骨はすでに乾燥していたので、すぐにその作業に取り掛かりましたが、骨に薬品が塗布されており、土も固まってしまっていたため、アセトンという薬品で溶かしながら取り除きました。割れている骨は土を落としてから接合します。このような作業を一つ一つの骨に行い、クリーニング作業は終了します。

クリーニングした骨は、どこの部位(例えば「右手人差指の先端」など)の骨なのかを判別して、残っている部位と無くなっている部位を調べます。図面と照らし合わせながら、無くなっている部位や、本来あるべき位置から移動してしまっている骨を調べてみると、後から何らかの力が加わった位置や方向などを推測することができます。今回は左手首から先の骨が体の右側にちらばっていること、右膝のお皿の骨が左手首の方に移動していること、背骨の骨がいくつか右側に移動していることなどから、体の左側から上・右の方向に骨を動かすような力が加わったということが推察できます。

埋葬された時期としては、人骨が検出された土層と同じ層位から出土した土器の型式から判断して、縄文時代中期後半〜後期初頭という時代幅が想定されます。しかし、後期初頭の土器に関しては出土数も少なく、上の層からの紛れ込みの可能性が考えられるため、この人骨については縄文時代中期後半、今から四〇〇〇年くらい前に生活していた人の骨だと考えて良いと思われず。(小松崎恵子)



真上から見た骨の位置 左膝のお皿の骨の位置と比べて、右膝のお皿の位置がかなり移動していることがわかります。

人骨からわかること

死んだ人が焼かれることなく埋葬されると、その多くは土に返ってしまいます。特に日本のように酸性に傾いた土壌ではそのスピードは早くなっています。そのため、ここで紹介するような遺存状態の良好な人骨が遺跡から出土することは非常に珍しいことなのです。ではこの人骨（三反田蜆塚貝塚一九八二年度第一号人骨）から何がわかるのかを見ていきましょう。

骨盤を形成する骨の形態的特徴から性別は、女性と判定されました。しかし腕の骨などには



三反田蜆塚貝塚人骨の虫歯 下顎の左側は犬歯・小臼歯の歯冠下に穴があき、大臼歯が1つ脱落しています。

筋肉がたくさん付いていた痕跡があり、かなりがっしりした体格の持ち主であることがわかります。身長は、遺存していた大腿骨の長さから一五一・二センチメートルと推定されます。

年齢については、すべての部位のクリーニングが終了していませんので、詳細については不明です。しかし、鎖骨の骨が完成していることから三〇歳以上であることはわかります。

歯の咬耗（磨り減り度合い）は、年齢推定には用いられることがあります。しかし、この人物の場合、咬耗は著しく、歯のエナメル質の下にある象牙質もかなり露出してあります。そのためこの場合は、加齢によるものではなく食性や慣習的なものによると考えられます。

骨からその人物が生前患った病気の痕跡（古病理学的所見）を見ることができません。ここでは、虫歯と骨関節症の所見が確認できています。どんぐりなどを食べるが多かった縄文時代の人びとには虫歯が多かったとされています。また、右肘と右膝の関節面が変形しています。右側のみにこの種の病変が見られるのは興味深いことです。

最終的にこの人骨の所見を提示するのは、現在進行中であるクリーニング作業の終了を待つてということになります。ここでは中間報告として、現段階で明らかにできる内容を示しておきました。今後の調査研究成果を楽しみにしていくください。（谷畑美帆）

歴史の小窓 その一

カスこそ宝……？



写真の遺物はなんでしよう。溶岩？惜しい！この遺物が出土した場所は、ひたちなか市馬渡の後谷津

（うしろやつ）製鉄遺跡です。この遺跡から見つかった、奈良時代の初めごろと考えられる製鉄炉から出土しました。そう、これは、砂鉄を溶かして鉄を造る時に出る、鉄のカスなのです。「鉄滓（てつさい）」といいます。溶けて流れ出て固まった感じのこの鉄滓は、「流出滓（りゅうしゅつさい）」に分類され、製鉄炉が高温を維持し、順調に進んだ様子を私たちに教えてくれます。「カス」だって、そこに存在する理由が必ずあるものです。

古墳時代の頃に日本で開始された鉄造りは、奈良時代、茨城の地にも入ってきました。その頃の製鉄炉は、調査例がまだ少なく、県内ではまだ四遺跡しか知られていません。その貴重な遺跡の一つが、私たちのひたちなか市にある、後谷津製鉄遺跡なのです。（佐々木義則）

参考文献 『後谷津製鉄遺跡 第2次調査報告書』



二〇〇八年五月一六日に実施した遺跡めぐり「千葉県の貝塚散歩」の参考展示として、「加曽利と堀之内」を開催しました。もともとは千葉県県の地名「加曽利」「堀之内」が、そこで発見された貝塚の名前になり、貝塚が調査研究されて、出土した土器が関東地方を代表する縄文時代の型式名称として定着します。展示では、市内の君ヶ台貝塚、三反田蛸塚貝塚、大洗町の大貫落神貝塚（藤本先史資料）などの土器を陳列して、ひたちなか市周辺の「加曽利E式」「堀之内式」「加曽利B式」を解説しました。その一部は、現在もセンター標本陳列室に展示してあります。

遺跡めぐりの当日は天候にも恵まれ、参加者二九名添乗員二名により、ほぼ予定通りの日程で各所を見学することができました。参加者の一人、臼井克夫さんに当日のレポートを寄稿いただいています。

「千葉県の貝塚散歩」に参加して

臼井 克夫

埋文センター主催の今年の「遺跡めぐり」は有名な千葉県の「加曽利貝塚」と「堀之内貝塚」と知っては非行きたいと思った。千葉市の「加曽利」の方はメガネの形をした日本で最大級の貝塚として知られており、かつて山内清男博士たちが加曽利E式やB式土器を発掘した標識遺跡として学史的にも著名な貝塚である。一方、市川市にある「堀之内」の方も後期の堀之内式土器の標識遺跡になっているし、その近くの市川市立考古博物館には早期の田戸下層式土器に明るい領塚正浩氏が勤務されていて、今回の見学の道案内をして頂けると聞き私に楽しみにしていた。

最初に「堀之内」を訪れた。長身にして物柔らかな雰囲気のある領塚氏の案内で樹木の生い茂った小径を辿ると、いたるところに貝殻が散乱していて、



上：堀之内貝塚にて

左が説明する領塚正浩さん、右が聞き入る臼井克夫さん。

下：加曽利貝塚にて

勧められるまま予定になかった記念撮影もしました。

その上を踏みしめるように歩いた。途中、放射肋のある小さな二枚貝を拾ったので見てもらおうと「ハイ」というアナタラ属の貝であった。次に訪れた千葉市の「加曽利」の方は広い草原という趣きで、ところどころに地ぶくれのような丘が見えた。そこには貝層の断面を観察出来る場所があって、丘を作っているのが分厚い貝の堆積であることが分かった。我々を案内してくれたのは地元の人たちであったが、終始熱心に説明してくれた。はるか遠い昔この地に生きた人々がいて、その人々の残したものを大切に守っている人たちがいることを知り少なからず感動した。



この展示は、「ふるさと考古学 ④石の考古学」の参考展示として、市内から出土した古墳時代の石製模造品を紹介しました。石製模造品とは、加工しやすい滑石(かつせき)などの軟質の石材を使用して、斧・鎌などの農工具、剣・甲などの武器・武具、勾玉・下駄などの服飾具などを模造した非実用的なものです。展示ケース内には四つのボードを設置し、石製模造品の種類、古墳から出土した石製模造品、製作址から出土した石製模造品、石製模造品の材質を展示しました。



古墳から出土した石製模造品では、那珂湊中学校近くのぼんぼり山古墳の埋葬施設内から出土した剣と双孔円板を展示しました。

製作址から出土した石製模造品では、武田遺跡群西端遺跡で確認された古墳時代中期の住居跡(市内遺跡第三号住居跡)の資料を展示しました。この住居跡からは、石製模造品の未完成品や製作の過程でできる滑石の破片、研磨の時に使用されたと思われる砥石等が出土していることから、石製模造品を製作していたものと考えられます。

石製模造品の材質では、常陸太田市町屋や長谷町等で採取した滑石や片岩・粘板岩・蛇紋岩を展示しました。茨城県内で滑石を産出するのは、常陸太田市の「日立変成帯」です。原石は、同一の露頭でも黒く緑く薄茶く灰色があるため、石製模造品もいろいろな色をしています。

(稲田健一)



夏休みの宿題 (2008.8.19)

「ふるさと考古学」を

お手伝いするまで



綿引 逸雄

私が遺跡発掘を初めて経験したのは高校三年生の時でした。受験生の身でありながら、夏休みの全てを日立市上の代遺跡の発掘現場へ通ったアホでした。暑い日差しの中、移植ごとの次のひと掻きで何が顔をだすのかわからない中での楽しみ、未知のものを自分自身の手で世に出せる喜びを味わいました。大学時代も、水戸市の金洗沢遺跡、常陸大宮市の小野天神前遺跡等たくさん遺跡発掘に参加し、触れるとぼろぼろになり土に還ろうとする土器片やその力強い文様を持つ土器片に直に触れては、歴史の長さや先人の偉大さを感じ、ロマンを味わう日々でした。そのような中、金洗沢遺跡の発掘現場の粘土から長野県曾利遺跡出土の水煙渦巻文土器を真似て作り、現場で焼いてみたのが土器作りの始まりでした。以来三〇年、学校や公民館で縄文土器作りの指導をするかたわら、今

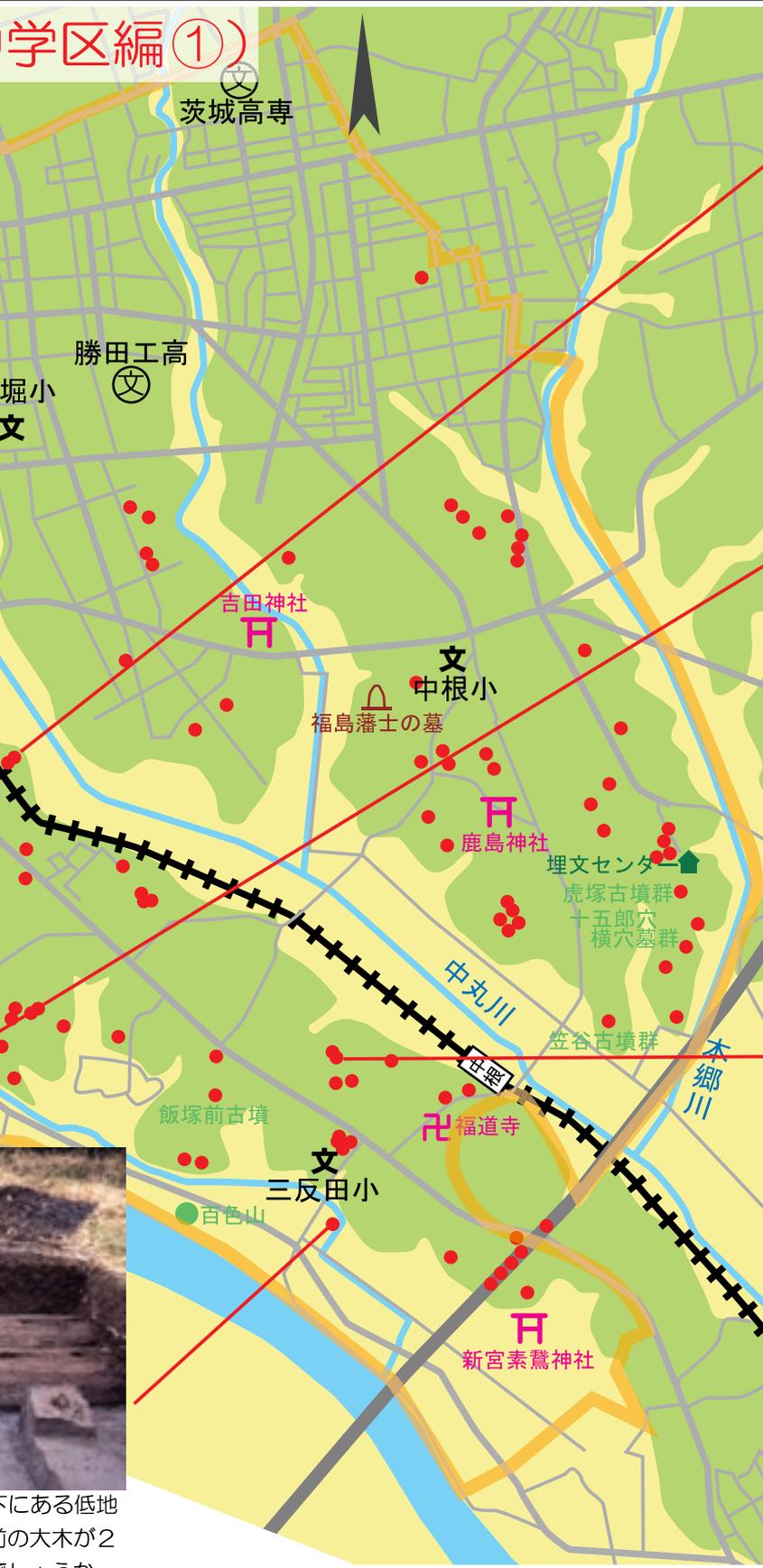
でも縄文土器を真似て作品を作ることがありませんが、先人の土器にはとうていおよびません。どのように作ったのか、その技術力の高さには驚かされ、なぞは深まるばかりです。

卒業後の就職先は考古学の世界ではありませんでしたが、日曜考古学として、手弁当で古墳測量に参加しました。これは、師の言葉である「発掘は破壊である。二度と復元できない。私たちは発掘の名のもとに遺跡を破壊してきた。懺悔の意味もこめて、せめて、名もない地方の古墳の地形測量を行い、存在を世に明らかにしておこう。」との考えに賛同したからでした。また、考古学の研究成果を学校教育の場に広められたらという思いで、土器作りを小学六年の歴史授業の導入として取り入れることを始めました。材料の準備が大変でしたが、実施後の子どもたちの充実した顔は、疲れを忘れさせるものでした。

そのような中、常陸大宮市歴史民俗資料館で縄文土器作り講座を行った時、泉坂下遺跡（弥生中期）の発掘調査が行われる予定があることを知りました。三〇余年前、人面付き土器（人面土器）が三個出土した小野天神前遺跡の発掘調査に参加した私は、「もう常陸大宮から、人面土器の出土はないだろう。それくらい小野天神前遺跡の三個体は特別なのだ」という思いから、人面土器の出土の有無を友人と賭けました。それが、「ふるさと考古学」のお手伝いをする

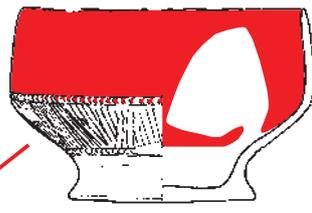
きっかけとなりました。なんと、市内で四個人面土器が出土してしまったのです。勿論、賭けに負けた私は、差し入れを持って遺跡を訪ねることになりました。この出会いが、「ふるさと考古学」のお手伝いをするきっかけとなりました。そのわけは、泉坂下遺跡で、手弁当の学術調査を行い、人面土器を世に明らかにしたメンバーが、「ふるさと考古学」を主催し、未来に生きる子どもたちのために活動していることを知り、その真摯な活動に賛同させられたからです。また、「日立ふるさと文化少年団」で子どもたちを対象にふるさと文化の追体験をさせる活動をお手伝いしていることから、「ふるさと考古学」の一環をお手伝いを出来ることは、私にとって意義あることでした。

いつも土器作りをして、企画・準備・運営する担当者苦労には頭が下がり、ボランティアの方々の協力には、たのもしさと人に対する温かさを感じます。また、子どもたちには「美味しいところ取りの体験にはさせたくない」「体験あつて学習なしの機会にはさせたくない」とも思います。「時には失敗しても、次こそは失敗から学ぶ経験」をさせたいとも思います。とにかく、経験不足の現代っ子には、直火を扱い、粘土を焼き物に変わらせる体験を通して、火の持つ力を肌で感じ取らせるなど、多様な経験・体験を行い、将来の自分作りの役に立たせて欲しいと願っております。

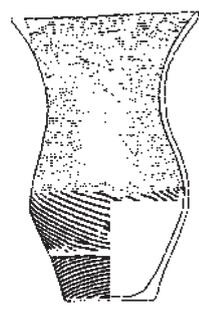
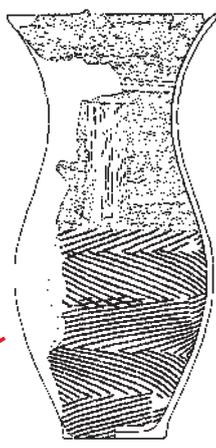


下にある低地
の大きな木が2
本あります。
どうでしょう。

約 800 年前
平安時代



遠原貝塚には、小規模な地点貝塚がいくつも残されています。これは、住居跡から出土した縄文時代前期の浅鉢形土器です。赤色顔料で、内面にも文様が描かれています。



岡田遺跡には、弥生時代後期の集落跡が確認されています。これらは、那珂川流域に特徴的な「十王台式」と呼ばれる土器で、煮炊きに使われていたものです。



三反田蛭塚貝塚から出土した縄文時代の土偶です。この遺跡からは、土偶の他にも動物の骨で作られた道具など貴重な遺物がたくさん出土しています。



三反田下高井遺跡で調査された古墳時代から平安時代の住居跡の写真です。長い間住居が作られたため、いくつもの住居跡が重なっています。

ひたちなか市の遺跡 2 (勝田一中)

勝田一中学区には、現在、83の遺跡がみついています。この数は市内でもっとも多い数です。今回紹介する東石川小(南区)・勝倉小・三反田小学区は、中丸川と那珂川に挟まれた地域で、42の遺跡があります。この中には、縄文時代の三反田蜆塚貝塚や遠原貝塚、古墳時代の三反田下高井遺跡や大平古墳群、飯塚前古墳といった、有名な遺跡が存在しています。

遺跡の発掘調査は1950年代から行われており、2007年までに107回実施されています。この数も市内でもっとも多い数です。調査では、住居跡が394基みついています。遺跡から出土した遺物には、縄文時代の土偶や動物の骨でつくられたつり針、乳飲み児を抱く埴輪等貴重なものがたくさん出土しています。

2007年までに発掘調査された住居跡の数
 勝倉地区：39基 三反田地区：355基
合計：394基

2007年までに発掘調査された遺跡 (地図上の●印)

勝倉地区：金上遺跡、金上埴輪遺跡、金上向山遺跡、勝倉若宮遺跡、勝倉古墳群、大平古墳群、大平A遺跡、大平C遺跡、殿塚古墳群、遠原貝塚、遠原遺跡、大房地遺跡、相対古墳群、相対遺跡、畠ヶ原遺跡
 三反田地区：三反田新堀遺跡、岡田遺跡、天王前遺跡、飯塚前遺跡、飯塚前古墳、新平埴輪遺跡、新平埴輪古墳、三反田遺跡、上河原遺跡、三反田蜆塚貝塚、三反田蜆塚遺跡、蜆塚西貝塚、内手遺跡、下高井遺跡



金上古墳では、埋葬施設の石室の壁に、弓矢を入れる道具の「鞆(ゆぎ)」の絵が彫ってありました。



大平古墳群からは、乳飲み児を抱く埴輪が見つっています。この埴輪は全国でも非常に珍しいものです。



三反田下河原遺跡は、現在の水田の下に遺跡です。調査では、古墳時代以前の本が見つっています。これは丸木舟で



考古学への道に進む直接の切っ掛けが何であつたかは明確には答えられないが、考古学に入るターニング・ポイントは周辺にいくらでもあつた。高校時代の夢は小説家で何回か懸賞小説に応募したことがあるが陽の目を見ることはなかつた。

中学時代は下館にいた。イトコが関城町にいて、良く遊びに行つた。近くに船玉古墳があり、石室内に絵がかいてあるというので何回か入つて見たが良く分らなかつたし、あまり興味関心も薄かつたようだ。

高校は下館一高に入つたが、すぐに白河高校へ転校した。そこで初めて土器を見た。天王山という地名だけが不思議と頭の中にある。

白河高校から那珂湊一高へ転校した。父が農林省から茨城県庁へ出向し、一家転住で茨城へ来たためである。父の仕事は霞ヶ浦治水事業のためで、護岸工事の土取りのために三味塚古墳をこわした。その時、父が持ち帰つた埴輪片を初めて手にして、多少は興味を持ったのかも知れない。

高校三年の冬、家の裏にあつた古墳が宅地造成のために壊され、石室が露出していたのが印象的であつた。そこに線刻の図文があり雨に打たれて青みがかつた色彩が神秘的であつたのが印象に残っている。これが殿塚(金上)古墳である。

高校卒業後、浪人生活に入った。県立図書館

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第1回 考古学との出会い

プロフィール

1938(昭和13)年茨城県水戸市生まれ。明治大学文学部史学地理学科卒。1962(昭和37)年より1998(平成10)年まで茨城県内公立高校勤務。現在、ひたちなか市文化財保護審議会会長・ひたちなか市史跡保存対策委員・茨城県考古学協会会長／主な著書『原始古代の茨城』『茨城県の装飾古墳』等



川崎 純徳

へ受験勉強のために通つた。勉強に疲れると松本清張の短編集を読んだ。その一つに『風雪断碑』があつた。主人公の生きざまに引かれるところがあり、これが考古学の道へ進む大きな動機となつたのかも知れない。考古学の本も何冊か読んだ。今でも憶えているのは小林行雄の『日本考古学概説』や河出書房の『日本考古学講座』だ。そこで明治大学の後藤守一、杉原荘介先生の存在を知つた。それより驚ろいたのは縄文時代より古い歴史が日本列島に存在したことであつた。

そのころ、まだ小説を書いていた。テーマは日本の古典を題材としていたから、古典はほとんど目を通した。中でも『古事記』『日本書紀』は良く読んだ。

図書館通いのあの日、父の知人で建築会社の社長をしていた弓削さんという方に会い、食事に誘われた。レストランでコース料理をご馳走になつたが、窮屈な食い物には閉口した。早く逃げ出したいが、弓削社長の話しに耳を傾けた。弓削社長は明治大学の卒業生で明治の自由な学風や卒業生との人間関係などを熱心に話され、明大も選択肢の一つに加えても良いのではないかという。

年が明けた昭和三三年、これ以上の浪人生活は出来ない。その時、不思議と書物の中の後藤先生、杉原先生のいる明治大学と弓削社長の母校の明治大学が重なりあうようになっていた。受験のほんの二、三ヶ月前のことであつた。

三ツ塚古墳群の鉄鏃

稲田 健一

市内阿字ヶ浦から平磯地区にかけては海岸線に沿って道路が走っており、海を眺めながらのドライブには最高のルートです。その海岸道路の西側に接する台地上に、120基以上の古墳が存在していることはあまり知られていません。北は市内最大規模を有する川子塚古墳からはじまり、南へと磯崎東古墳群・磯合古墳群・入道古墳群・三ツ塚古墳群・新道古墳群が連なるように位置しています。今回紹介します三ツ塚古墳群は、これらの古墳群の南端に位置しています。「三ツ塚」という古墳の名称は、大きな円墳が3つ並ぶことから、地元で古くからそう呼ばれていました。2007年度、この古墳群から出土した鉄製品の保存処理が行われました。この保存処理の終了と展示を機に、鉄製のやじり「鉄鏃」の分析を行いました。鉄鏃は古墳等の年代を知る上で重要な遺物です。今回の分析により、鉄鏃には6世紀前半頃と6世紀末頃の2つの時期のものがあることが判明しました。

1 調査の歩み

三ツ塚古墳群については、江戸時代の一八二二(文化二)年に人物埴輪が出土したことが当時の文献に記されている。水戸藩の栗田寛は『葬礼私考』に、「平磯村所出土偶図」としてその埴輪を掲載しており、その他にも栗田維良の『事蹟雜纂』や『古図類纂』等複数の文献に掲載されている。

一九四五(昭和二〇)年九月には、どの古墳かは特定できないが、埴形土器一点が出土している。

本格的な調査は、平磯中学校の建設を機に実施された。一九四九(昭和二四)年三月十九日頃、國學院大學の大場磐雄が古墳群の測量図の作成(図1左)と第一号墳(現第一四号墳)の試掘調査を三日間実施している。同年三月二七〜三〇日には、東京大学の中島寿雄が、大場磐雄の測量図を補足する図の作成と、機械を使用した物理探査による第三号墳(現第一二号墳)の埋葬施設の位置の測定を実施している。その後、同年四月三〇日〜五月四日に当時文部技官であった齋藤忠と茨城県史蹟調査委員の埴瑞比古・桜岡威・広瀬栄一らが発掘調査を行い、同年一月一三・一四日と一九五〇(昭和二五)年七月二九・三〇日にも補足の調査を実施している。一九五二(昭和二七)年に刊行された報告書によると、破壊される第二・八・一二号墳の三基について調査を実施し、その他はそのまま保

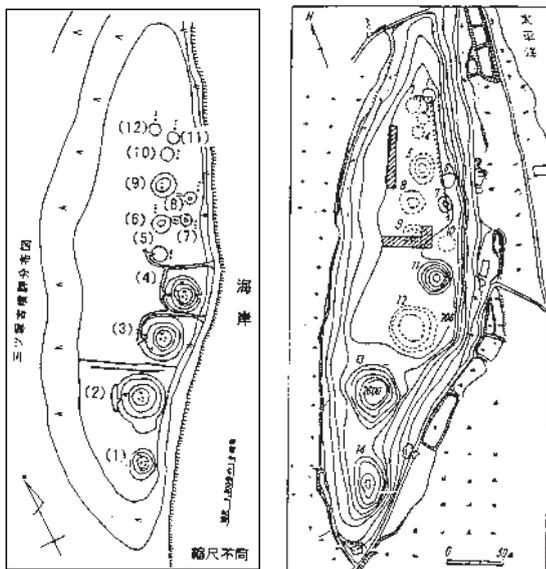


図1 三ツ塚古墳群古墳分布図(左図が旧番号)

番号	旧番号	墳形	径(m)	高さ(m)	埋葬施設	出土遺物	調査年	備考
1	-	円墳	10	0.7	箱式石棺	ガラス小玉4	1957年	湮滅
2	12	円墳	14	1	横穴式石室	大刀3, 鉄鏃約89, 刀子1, ガラス小玉31, 円筒埴輪	1949年	湮滅
3	11	円墳	10	0.9	-	-	(1949年)	湮滅
4	10	円墳	12	1	-	-	(1949年)	湮滅
5	9	円墳	27.3	2.4	-	-	(1949年)	湮滅
6	8	円墳	10	1	竪穴式石室?	-	-	湮滅
7	7	円墳	9.5	1	竪穴式石室2	大刀1	1957年	湮滅
8	6	円墳	21.8	2.4	竪穴式石室	鉄鏃6, 刀子1, 須恵器杯1, 円筒埴輪	1949年	湮滅
9	5	円墳	20	2.5	竪穴式石室2	-	(1949年)	湮滅
10	-	円墳	-	-	-	-	-	湮滅
11	4	円墳	36.4	5.5	箱式石棺	滑石製白玉3, 大刀1, 鍔金具1	1957年	現存
12	3	円墳	50.9	4.2	確認できず	大刀1, 石製模造品(刀子)1, 土師器20以上, 壺形埴輪4以上	1949年	湮滅
13	2	円墳	52.7	4.4	未調査	-	未調査	現存
14	1	円墳	38.2	3.5	未調査	円筒埴輪	試掘	現存

表1 三ツ塚古墳群古墳一覧表

存することにしたとの記述があるが、実際には第三〜六・九・一〇号墳も湮滅している。

これらの調査時に作成された古墳分布図をみると、大場の作成した測量図には古墳が一二基記載されており、南から北へ古墳名が付されている(図1左)。中島はそれに古墳を一つ追加し、一三基の古墳を図示したとあるが、その図は不明である。一方、齋藤の報告書には、一四基の古墳が図示され、古墳名も大場のものとは逆に北から南へと番号が付されている(図1右)。平磯中学校に保管されていた遺物には、出土した古墳の番号が墨で記されており、齋藤の報告書の記載と遺物を照らし合わせてみると、その番号は大場が付した古墳の番号であることが分かった。よって、齋藤も調査および整理作業の段階までは大場の付した古墳番号を使用していたが、報告書作成の段階で古墳に新しい番号を付け直したことが推測される。ここでは齋藤の報告書に記載された古墳番号を使用する。

一九五七(昭和三二)年には、平磯中学校の校庭の拡張に伴い、大森信英や西宮一男、茨城高校日本史クラブの生徒たちにより三基(第一・七・一一号墳)の古墳の発掘調査が実施されている。古墳は調査終了後に破壊され、現在残っている古墳は第一・一三・一四号墳の三基のみである。

2 古墳の概要

古墳は、調査により一四基確認されている。

古墳の形状はほとんどが円墳で、第一三号墳のみ帆立貝形古墳になる可能性が指摘されている。古墳の規模は、直径一〇〜二〇mが主体であるが、直径三〇m代の円墳二基(第一・一四号墳)、五〇・九mの円墳(第二二号墳)、五二・七mの円墳(帆立貝形?・第二三号墳)と大型の古墳も存在する。確認されている埋葬施設は、箱式石棺(第一・一一号墳)、竪穴式石室(第六〜九号墳)、横穴式石室(第二号墳)がある。

出土遺物には、円筒埴輪や人物埴輪、壺形埴輪、須恵器杯、土師器、大刀、鉄鏃、ガラス小玉、石製模造品(刀子・白玉)がある。注目される遺物として、第一二号墳から出土した壺形埴輪が挙げられる。この埴輪は、那珂川対岸に位置する直径九五mの大型円墳の車塚古墳から出土した壺形埴輪の影響がみられるもので、特異な形を呈する。時期は五世紀前半の時期が推定されているので、当古墳が現時点において市内で最古の古墳となる。

3 鉄鏃について

鉄鏃は、報告書に第二号墳で約八九点、第八号墳で六点出土したとあり、長頸鏃五点(図4・1〜5)と無頸鏃二点(6・7)のみ実測図が掲載されている。図示された鉄鏃は、1・2・6・7が第二号墳、3〜5が第八号墳出土である。

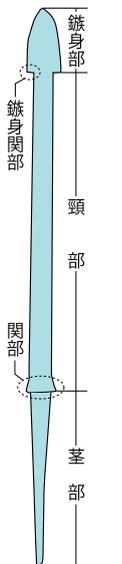
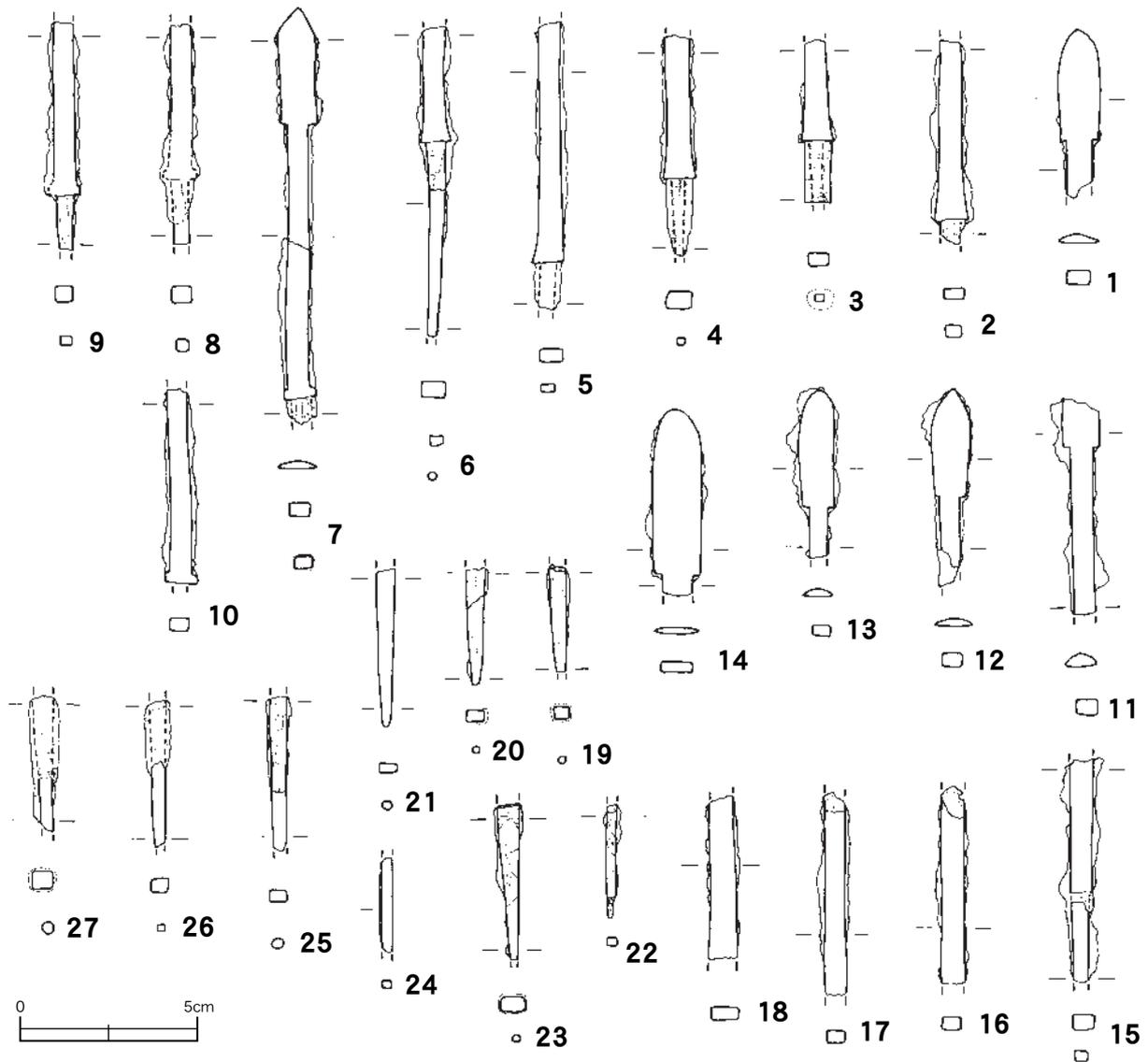


図2 鉄鏃各部名称

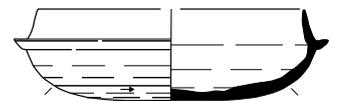


三ツ塚古墳群第12号墳出土土器・埴輪



鉄鏃・土器観察表

- 1 残存：鏃身部 法量：残存長 48mm, 鏃身部長 32mm・幅 12mm・厚 3mm, 頸部幅 7mm・厚 4mm, 重量 5.3g 備考：鏃身部片丸造。
 - 2 残存：頸～茎部 法量：残存長 57mm, 頸部幅 6～10mm・厚 3mm, 茎部幅 5.5mm・厚 4mm, 重量 7.9g 備考：茎部に木質部残る。
 - 3 残存：頸～茎部 法量：残存長 46mm, 頸部幅 6～9mm・厚 4mm, 茎部幅 2.5mm・厚 2mm, 重量 4.5g 備考：茎部に木質部残る。
 - 4 残存：頸～茎部 法量：残存長 62mm, 頸部幅 7～9mm・厚 5mm, 茎部幅 2mm・厚 2mm, 重量 7.1g 備考：茎部に木質部残る。
 - 5 残存：頸～茎部 法量：残存長 82mm, 頸部幅 6～9mm・厚 4mm, 茎部幅 4mm・厚 2mm, 重量 9.2g 備考：茎部に木質部残る。
 - 6 残存：頸～茎部 法量：残存長 87mm, 頸部幅 6～9mm・厚 4mm, 茎部幅 2～4mm・厚 2～3mm, 重量 6.8g 備考：茎部に木質部残る。
 - 7 残存：鏃身～茎部 法量：残存長 117mm, 鏃身部長 33mm・幅 10～11mm・厚 2mm, 頸部長 77mm・幅 6mm・厚 5mm, 茎部幅 5mm・厚 4mm, 重量 13.9g 備考：鏃身部片丸造, 茎部に木質部残る。
 - 8 残存：頸～茎部 法量：残存長 62mm, 頸部幅 5～6mm・厚 5mm, 茎部幅 3mm・厚 3mm, 重量 6.4g 備考：茎部に木質部残る。
 - 9 残存：頸～茎部 法量：残存長 64mm, 頸部幅 5mm・厚 5mm, 茎部幅 3mm・厚 3mm, 重量 8.2g 備考：茎部に木質部残る。
 - 10 残存：頸部 法量：残存長 54mm, 頸部幅 5～6mm・厚 4mm, 重量 6.8g 備考：-
 - 11 残存：鏃身～頸部 法量：残存長 61mm, 鏃身部幅 10mm・厚 4mm, 頸部幅 6mm・厚 5mm, 重量 7.9g 備考：鏃身部片丸造。
 - 12 残存：鏃身部 法量：残存長 50mm, 鏃身部長 31mm・幅 11mm・厚 2mm, 頸部幅 5.5mm・厚 4mm, 重量 4.8g 備考：鏃身部片丸造か。
 - 13 残存：鏃身部 法量：残存長 48mm, 鏃身部長 33mm・幅 9mm・厚 2mm, 頸部幅 5mm・厚 3mm, 重量 4.1g 備考：鏃身部片丸造か。
 - 14 残存：鏃身部 法量：残存長 53mm, 鏃身部長 47mm・幅 14mm・厚 2mm, 頸部幅 9mm・厚 2.5mm, 重量 4.9g 備考：-
 - 15 残存：頸～茎部 法量：残存長 63mm, 頸部幅 6～7mm・厚 5mm, 茎部幅 4～5mm・厚 3～4mm, 重量 8.8g 備考：茎部に木質部残る。
 - 16 残存：頸部 法量：残存長 56mm, 頸部幅 6mm・厚 4mm, 重量 6.0g 備考：-
 - 17 残存：頸部 法量：残存長 57mm, 頸部幅 6mm・厚 3.5mm, 重量 5.0g 備考：-
 - 18 残存：頸部 法量：残存長 46mm, 頸部幅 7～8mm・厚 4mm, 重量 5.4g 備考：-
 - 19 残存：茎部 法量：残存長 30mm, 茎部幅 2～4mm・厚 2～4mm, 重量 1.0g 備考：茎部に木質部残る。
 - 20 残存：茎部 法量：残存長 33mm, 茎部幅 2～5mm・厚 2～3mm, 重量 1.1g 備考：木質部残る。
 - 21 残存：茎部 法量：残存長 45mm, 茎部幅 2～5mm・厚 2～3mm, 重量 1.4g 備考：木質部残る。
 - 22 残存：茎部 法量：残存長 32mm, 茎部幅 2mm・厚 2mm, 重量 0.6g 備考：木質部残る。
 - 23 残存：茎部 法量：残存長 44mm, 茎部幅 2～6mm・厚 2～5mm, 重量 2.0g 備考：木質部残る。
 - 24 残存：茎部 法量：残存長 27mm, 茎部幅 2.5mm・厚 2mm, 重量 0.6g 備考：木質部残る。
 - 25 残存：茎部 法量：残存長 43mm, 茎部幅 3～5mm・厚 3mm, 重量 2.1g 備考：木質部残る。
 - 26 残存：茎部 法量：残存長 41mm, 茎部幅 2～5mm・厚 2～4mm, 重量 1.9g 備考：木質部残る。
 - 27 残存：茎部 法量：残存長 38mm, 茎部幅 3～6mm・厚 3～5mm, 重量 2.6g 備考：木質部残る。
- 須恵器杯 残存：50% 法量：口径 142mm, 最大径 167mm, 器高 49mm 色調：灰～青灰色 胎土：礫（白少量）, 砂（白多量） 焼成：硬質
技法等：外面底部回転ヘラ削り, 内面底部に同心円のスタンプ痕。 使用痕：なし



土器 S=1/4

図3 三ツ塚古墳群出土鉄鏃・杯形土器実測図

現在センターに保管されている鉄鏃は二七点なので、約六八点の所在は不明となる。二七点を細かくみると、鏃身部が六点(図3・1・7・11・14)、頸部が二点(2・6・8・10・15・18)、茎部が九点(19・27)である。1は鏃身部が長三角形で、鏃身関部に逆刺がみられる。2・6は関部が台形を呈する。7は鏃身部が五角形に近い形を呈する。関部は棘関で、8・10も同様である。11・14は鏃身部が長三角形で、鏃身関部が直角関である。15は関部が直角関である。19・27の茎部には木質部が残るものがある。年代を探る特徴をみてみると、鏃身関部は逆刺のあるもの(1)と直角関のもの(7・11・14)があり、逆刺のあるものがやや古い年代のものとして推測できる。関部は台形のもの(2・6)と棘状のもの(8・10)があり、台形は六世紀中葉

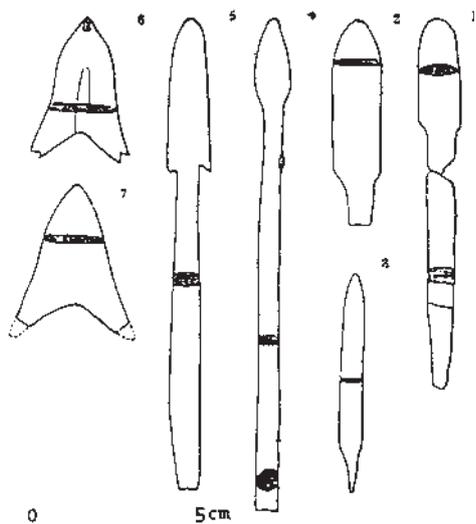


図4 報告書に図示された三ツ塚古墳群出土鉄鏃実測図 ([齋藤 1952] から転載)

以前で、棘状は六世紀後葉以降とされているので、その年代が当てはめられる。すると、1・6は古く、7・14は新しいことが分かる。報告書では第二号墳と第八号墳から鉄鏃が出土しており、埋葬施設の違いから横穴式石室ではない第八号墳が古い時代の築造と思われる。第八号墳からは六点の鉄鏃が出土していると記されているから、古いものと考えられる1・6の六点が第八号墳出土のものであろう。すると新しいものと考えられる7・14は第二号墳の出土となる。15・27に関しては古墳を特定することが出来ないが、鉄鏃の出土数の多い第二号墳の可能性が高い。

鉄鏃とその他の出土遺物から古墳の年代を推測すると、第八号墳は墳丘から出土した須恵器の杯形土器(図3下)と鉄鏃の形状から六世紀



三ツ塚古墳群出土鉄鏃

前半頃と思われる。第二号墳は7の鏃身部と関部の形状、墳丘から円筒埴輪が出土していることから六世紀末頃と考えられる。

4 三ツ塚古墳群について

鉄鏃の分析により、第八号墳が六世紀前半頃、第二号墳が六世紀末頃の年代が推定できた。これまで三ツ塚古墳群で古墳の年代が判明していたものは五世紀前半頃と推定された第一二号墳だけしかなかったため、今回の検討で三つの古墳の年代が分かったことになる。よって、三ツ塚古墳群は、五世紀前半頃から古墳が造られ始め、六世紀前半頃、六世紀末頃と約二百年の間、継続していたかは現段階では判断できないが、古墳が造られたことになる。市内で長期にわたり古墳が造られていたと推定されるのはこの他には磯崎東古墳群しかない。また、現段階では市内でもっとも古い古墳が含まれることから、この古墳群が市内の古墳時代を探る上でとても重要な遺跡となる。

参考文献

- 齋藤忠一九五二『茨城県那珂郡平磯町三ツ塚古墳群調査報告』茨城県教育委員会、大森信英一九五八『那珂湊市平磯町三ツ塚古墳調査報告Ⅱ』那珂湊市教育委員会、白石真理二〇〇四『ひたちなか市三ツ塚第12号墳出土遺物について』『埴輪研究会誌』第八号埴輪研究会

文 埋 センターの 日 々 2008 前期

4月

3-6 虎塚古墳壁画公開 / 3 国立歴史民俗博物館友の会見学 / 4 ひたちなか市役所新人職員研修会 / 6 鷹ノ巣遺跡成果報告会 (公社) / 25・26 三反田新堀遺跡試掘調査 / 26 ワンケース・ミュージアム

8 「加曾利と堀之内」開始 / 杉の子絵画教室見学と写生会 / 29 市毛小学校へ資料貸出【縄文土器・弥生土器】 / 30 中根小学校6年生社会科見学 ←



5月

1 阿字ヶ浦小学校6年生社会科見学 / 2 中根小学校生土器を保持して質問 / 6 第1回企画展「井上廣明コレクション―埴輪―」終了 / 8 千葉歴史倶楽部見学 / 9 東石川小学校6年生社会科見学 / 13 第2回企画展「三

反田蛭塚貝塚の人骨クリーニンング開始 / 15-17 三反田新堀遺跡試掘調査 / 16 遺跡めぐり「千葉県の貝塚散歩」開催 / 22 中根小学校3年生社会科見学 / 22・24 長砂久保遺跡試掘調査 / 23 佐野小学校6年生社会科見学 / 24 ボーイスカウト水戸8団見学 / 28 講座「芸術と歴史の旅講座」(文化課) / 30 勝倉小学校6年生社会科見学 / 31 ワンケース・ミュージアム

6月

7 「鷹ノ巣遺跡の成果」終了

4・7 入道古墳群試掘調査 / 6 ひたちなか市社会福祉協議会見学 / 7 鈴木敏則氏 (浜松市教委 賛元洋 (豊橋市教委 資料観察【武田石高・船窪・半分山】 / 中村信博氏資料観察【半分山】 / 8 筑西市古典文学同好会見学 / 13 枝川小学校6年生社会科見学 / 18 西谷津遺跡試掘調査 / 菅谷東小学校6年生社会科見学 ←



22 茨城キリスト教大学博物館実習施設見学 / 24 津田小学校6年生社会科見学 / ひたちなか市文化財愛護協会総会 / 東海村教育委員会施設見学 / 27 高野小学校6年生社会科見学 ←



28 ワンケース・ミュージアム 8 「加曾利と堀之内」終了 / 常陸太田市峰山中学校2年生職場体験学習 ←



7月

1 常陸太田市峰山中学校2年生職場体験学習 / 2 外野小学校3年生社会科見学 / 8 津田小学校3年生社会科見学 / 9・11 三反田新堀遺跡試掘調査 / 12 小美玉市玉里の史跡と自然を護る会見学 / 15・16 堀口遺跡試掘調査 / 15 平磯学習センター石鏃作り講習会 / 19 ワンケース・

虎塚古墳 花便り

1 ヤマユリ

虎塚古墳周辺は、現在も豊かな自然環境の中にあります。一九八八年に実施された植生調査では、八八科目四一五種の植物が確認されています。現在でも、春・夏・秋と季節によって様々な花が咲き、私たちの目を楽しませてくれます。特に、古墳公園内は、地元の方々の草刈り作業などによって手入れがされているため、今では少なくなった雑木林が残り、植物が生息しやすい環境になっております。ここでは、虎塚古墳周辺で見られる花を紹介します。

七月中旬から八月初めにかけて、虎塚古墳周辺は甘いにおいに包まれます。それが、今回ご紹介するヤマユリです。数は非常に少ないですが、花の大きさとにおいの強さでこの時期にもっとも目立つ花です。(稲田健一)



虎塚古墳に咲くヤマユリ (2008.7.24)

ミュージアム9「ひたちなか市域の石製模造品」開始／ふるさと考古学①「楽しい考古学」



／24常陸太田市郷土資料館へ資料貸出【向野の石器ほか】／26ふるさと考古学②「土器の考古学1」／27ふるさと考古学③「土器の考古学2」／30大洗町教育委員会視察／31中根小学校6年生虎塚についての研究

8月
 22外野小学校4年生親子夏休み自由研究相談／24ひたちなか市教育研究会夏期研究協議会／の平磯学習センター石鏃づくり



6ふるさと考古学④「石の考古学」(常陸大宮歴史民俗資料館との共催・那珂川河川敷および常陸

大宮市歴史民俗資料館山方館にて開催／27ふるさと考古学⑤「貝の考古学」／28第2回企画展「三反田蜆塚貝塚の人骨クリーニング」

調査／19-24博物館実習(茨城キリスト教大学・東北芸術工科大学)



23ふるさと考古学⑥「土器の考古学3」／24大越昌子氏分析試料採取【東中根の炭化米】



28谷畑美帆氏人骨観察【三反田蜆塚】



9月
 28読売文化センター見学

29文化庁視察／5津野仁氏(こちぎ生涯学習文化財団)資料観察と実測【十五郎穴の大刀】／ニ谷畑美帆氏へ資料貸出【三反田蜆塚人骨】

／29早川麗司氏(茨城県教育財団)資料観察【鷹ノ巣】／24小杉山大輔氏(石岡市教委)資料観察(武田石高)／26下関市立考古博物館へ資料貸出(三反田蜆塚の骨角器ほか)／28塩谷修氏(土浦市立博物館)資料観察【星神社古墳・梵天山古墳】／27埋文ウォーク見学(公社)／彩の国いきがき大学

28ワンケース・ミュージアム9「ひたちなか市域の石製模造品」終了

入館者状況 (2008.4.1～9.30)

月	個人		団体		計
	開館日数	(人)	(団体)	(人)	
4月	26	610	7 (1)	167 (56)	777
5月	27	406	10 (5)	597 (466)	1003
6月	25	226	10 (5)	446 (336)	672
7月	26	184	9 (3)	389 (271)	573
8月	26	331	13 (0)	211 (0)	542
9月	25	173	4 (0)	75 (0)	248
計	155	1930	53 (14)	1885 (1129)	3815

○内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社が開催する事業は「ひたちなか市報」及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business2.plala.or.jp/h-bunspo/>

編集後記の 笑つ壱輪

平磯学習センターからの依頼で、石鏃作りの指導をすることになった。前年の「ふるさと考古学」で受講生と一緒に石鏃作りを体験しただけなのに引き受けてしまい、特訓の日々が始まる。黒曜石という天然のガラスを左手で固定し、右手に握った鹿角の先端を縁に強く押し当てながら破片を細かく剥いでゆく。手袋をしないと危険だということも、血だらけになって思い出した。繰り返し作るうちにコツをつかみ、当日はなんとか指導の役割を果たせたかと思う。その後も、今年の「ふるさと考古学」で採集した久慈川の珪質頁岩やメノウを材料に練習を続けた。これらは、黒曜石よりも難しい。

アメリカ西部では、ネイティブ・アメリカンの祖先が使用していた石鏃の模造品が土産物として売られている。値段を見てみると、総じて黒曜石よりもメノウが高い。やはりメノウの方が難しいのだろう。黒曜石の石鏃には五〇セントで売られているものもあった。作りが下手と感じる石鏃は、大体二ドル以下の値段。これは敵わないという上手なものでも、六ドルを超えることはない。一日で作れる数は高が知れている。いくら上達しようとも、石鏃作りだけで生活するのは、どうやら無理のようだ。



ひたちなか埋文だより 第29号

編集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 ☎029-276-8311 FAX029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

2008年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター